

アンケート調査を用いた上気道炎症状とインフルエンザ感染症との関連についての検討

松原英俊

医仁会武田総合病院

【目的】病歴からの検討で咳嗽の54%がインフルエンザの潜伏期間である発症1～3日前に発現していた事を前本学会で報告した。2011年～2012年シーズンにおいて外来にインフルエンザ様症状で受診した患者に対しアンケート調査を行い、より詳細な上気道炎症状とインフルエンザ感染症との時系列関連について検討した。

【方法】平成24年1月21日から4月30日の期間特定医師の一般内科外来に受診しアンケートに署名にて研究協力を承諾しインフルエンザ症状を呈し迅速キットで陽性であった36例を解析対象とした。何らかのチェックが入るはずの21項目の回答率が80%以上である記載内容の信頼性の高い29例のうち1例は扁桃炎を合併し残り28例について解析した。突然の全身倦怠感とその後増悪が認められたり、発症時点は不明なるも明らかに数時間程度の経過で倦怠感が進行性に悪化したり、高熱が認められた時点をインフルエンザ発症日時として記載していただいた。インフルエンザ発症日時と関節痛、筋肉痛、咳、鼻汁、咽喉頭痛の症状の出現日時との時間差(それぞれを①②③④⑤とする)について検討した。28例中1例はインフルエンザ発症日時について記載がないため最終的に27例(男性17、女性10、平均38.2歳(16～72歳)、A型15、B型12)について解析を行った。

【結果】各症状のインフルエンザ発症との時間差の症例数(発現率),平均,分散はそれぞれ①10(37%) -0.05 ± 0.13 日,②3(11%) 0.00 ± 0.00 日③26(93%) -2.89 ± 7.42 日,④18(67%) -1.13 ± 2.27 日⑤13(48%) -0.87 ± 2.14 日であった。明らかな発症前の症状と考えられる-1日以前と以後では①で0例,10例,③で9例,17例と χ^2 乗検定で有意($P < 0.05$)に2群間の症状発現時期に差を認めた。

【考察】関節、筋肉症状はインフルエンザ発症と同時に発現していることが、咳嗽症状は発症より1日以前より35%出現しておりウイルスによる直接症状ではない可能性が示唆された。